

読書通信



No. 129

① 今やグローバル化の時代なのだから、英語力をつけない日本および日本人は敗者とならざるをえない、と言われるとお説ごもつとも、と思ってしまうのではないか。とはいえ、小学校から英語を必修にし、企業や特区で英語を公用語にする、というのは議論の余地なしなのかという疑問に見事に答えてくれた本に出会った。

施光恒『英語化は愚民化』（集英社新書、820円）は、国中で英語を自由に操れるようにならなければ日本の将来はない、などと言わんばかりの極論に真っ向から反対している。

世界経済を冷静に理解する必要性は高まっている。**中島精也**『傍若無人なアメリカ経済』（角川新書、928円）はレーガノミクス、リーマンショックなどアメリカに振り回される日本と自己中心的なアメリカ（特にFRB）の姿を前段にしたたかなアメリカ、欧州、中国、対照的な日本、それぞれの経済を手際よく解説している。世界は日本のバブルから学び、日本は足りないものだらけ、「すべては政治家の強い意志にかかっている」との結論はそのとおりだろう。

③ 安倍首相の「活躍」で祖父への関心が高まっている。**太田尚樹**『満州と岸信介』（KADOKAWA、1836円）は請われて満州へ渡る革新官僚、「満州国」の産業開発という「作品」を白地に描いていく一部始終、満州で培った豊

要するに英語、英語で進んでいけば日本の知的な中間層が活躍の場を失っていき、日本はグローバル資本主義によって蹂躪されるだろうとの危惧である。研究開発にせよ経済文化にせよ、あらゆる活動は基本的に日本語に基づいている、日本語で考えることが何より大事だ、英語で書いたり考えたりするのはほとんど日本人にとつて著しく効率が悪い、という。しかもツールとしての言語論だけでなく、翻訳の持つ意味、多文化共生、国際貢献、人生観など幅広い視点から考察している点で大いに刺激的だ。英語が重要なことは当然だが、本書の指摘には心して耳を傾けたいと思う。

② 株の乱高下に誰も驚かなくなった。世界が不安定化し、先行きの見通しが難しくなる中で、富な人脈、そして戦後の政治家人生まで、怪物ぶり（孫とはスケールがあまりに違う）が詳細に描かれる。甘粕正彦と満映、岸も絡んだアヘン謀略も含め興味深い内容だが、岸への評価が甘すぎる点は大いに不満が残った。

④ 上野の美術館で日本美術を楽しむ機会が気のせいか増えつつある中で、**小林泰三**『誤解だらけの日本美術』（光文社新書、1101円）はとても参考になった。俵屋宗達の風神雷神図屏風、キトラ古墳壁画、銀閣寺、阿修羅像をデジタル的に元の鮮やかな姿に戻す作業を題材に、その過程、復元の解析から強烈な印象を受けた。薄汚れているのを見てわびだ、さびだというのは勘違いだと言われて目から鱗とはこのことだろう。カラー図版が多く楽しめる。（純）